第1回　論説文　地図と抽象

ことばのむずかしい論説文／抽象と具体／長い記述

本文を読む 15分　設問 27分　解き直し 8分

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（①〜⑨は段落の番号）

①私たちは地図を、世界をそのまま縮めて写し取ったものだと考えがちである。駅から学校までの道順を確かめるとき、見知らぬ町で目的地を探すとき、手もとの地図が現実と正しく対応していることを、私たちはほとんど疑わない。しかし、地図とは本当に世界の「写し」なのだろうか。

②試みに、身近な街の地図を思い浮かべてみよう。そこには道路や鉄道、川や公園、学校や郵便局などが記号で示されている。けれども、その街を実際に歩いてみれば、地図には描かれていないものがいかに多いかに気づくはずだ。道端の街路樹、店先に並ぶ品物、行き交う人々、夕方になるとどこからか漂ってくる夕食のにおい。地図はそれらをことごとく省いている。言い換えれば、1地図は世界の大部分を切り捨てることによって、はじめて地図として成り立っているのである。

③アルゼンチンの作家ボルヘスに、この点を鋭く突いた短い物語がある。ある帝国の地図職人たちは、正確さを極めようとするあまり、ついに帝国と同じ大きさの地図を作り上げた。その地図は国土と一点の狂いもなく重なり合っていた。しかし後の世代の人々は、この巨大な地図を無用のものと見なし、風雨にさらされるまま打ち捨ててしまったという。すべてを写し取った地図は、もはや地図としての役目を果たさない。地図が役に立つのは、それが現実よりも小さく、現実よりも貧しいからなのだ。

④ここで重要なのは、何を描き、何を省くかという選択が、決して自明ではないということである。同じ土地であっても、登山者のための地図には等高線や山小屋が細かく記されるが、鉄道の路線図では、駅と駅との距離や方角さえゆがめられ、駅の順序と乗り換えの関係だけが強調される。気象情報で用いられる天気図に至っては、道路も建物も一切描かれず、等圧線と前線だけが示される。2どちらが正しい地図かを問うことには意味がない。それぞれの地図は、それを使う人の目的に応じて、世界から異なる側面を取り出しているのである。地図とは、世界の客観的な写しであるよりも先に、世界をどのように見るかという一つの視点の表明なのだ。

⑤このように考えると、地図をめぐる事情は、私たちが物事を理解するということ一般にも通じていることが分かる。複雑な現実を前にしたとき、私たちはそのすべてを一度に受け止めることはできない。そこで、ある観点から重要な要素だけを抜き出し、残りを捨てて整理する。これを抽象という。抽象と聞くと、現実から遊離した、分かりにくい思考のように感じる人もいるかもしれない。だが実際には、抽象こそが、混沌（こんとん）とした現実に秩序を与え、私たちが世界の中で道に迷わずに済むための不可欠な手段なのである。

⑥言語もまた、一種の地図であると言ってよい。たとえば「木」という語は、無数の個体の差異を捨象し、共通する性質だけを抽出することによって成立している。現実に存在するのは、高さも枝ぶりも葉の色も異なる一本一本の樹木であって、「木一般」なるものはどこにも存在しない。それにもかかわらず、私たちはこの語を用いることで、初めて目にする植物をも即座に「木」として認識し、その経験を他者と共有することができる。概念とは、経験の混沌（こんとん）に引かれた境界線なのである。

（創心館オリジナル文章）

⑦ただし、ここには一つの落とし穴がある。地図を使い慣れるにつれて、私たちは、地図が選択の産物であることを忘れてしまいやすいのだ。地図に描かれていないものは存在しないかのように思い込み、地図の上での近さを現実の近さと取り違える。路線図の上では隣り合っている二つの駅が、実際には歩いて行けないほど離れていることもあるだろう。同じように、ある見方で世界を整理することに慣れきった人は、その見方が数ある見方の一つにすぎないことに気づかなくなる。こうして、もともとは世界を理解するための道具であったはずの抽象が、3いつのまにか世界そのものの代わりに居座ってしまうのである。

⑧では、私たちはどうすればよいのか。地図を捨てて、ありのままの現実に向き合えばよいのだろうか。そうではあるまい。地図なしで知らない街を歩くことが困難であるように、抽象なしで複雑な現実を理解することはできない。必要なのは、地図を手放すことではなく、一枚の地図の背後に、描かれなかった無数のものがあることを意識し続けることである。そして、ときには別の目的で作られた地図を重ね合わせ、自分の見ていた世界を4相対化してみることである。

⑨物事を理解するとは、世界の写しを手に入れることではない。それは、何を拾い何を捨てるかを自覚的に選び取り、その選択を絶えず問い直していく営みなのである。

問一 1地図は世界の大部分を切り捨てることによって、はじめて地図として成り立っているとあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。最も適しているものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　地図は実際に歩いて確かめたものだけで作られ、確かめられないものは描けないから。
イ　すべてを写し取った地図は現実と同じ大きさになり、地図の役目を果たさなくなるから。
ウ　描かれていないものは重要ではないので、省いたほうが現実を正しく写せるから。
エ　地図の記号の数には限りがあり、記号で表せるものしか描くことができないから。

問二 2どちらが正しい地図かを問うことには意味がないとあるが、その理由を次のようにまとめた。［a］は本文中から九字で抜き出し、［b］は本文中から二十二字で抜き出して初めの五字を書きなさい。

それぞれの地図は［a］に応じて世界の異なる側面を取り出したものであり、地図とは世界の客観的な写しである以前に［b］だから。

a

b

問三 3いつのまにか世界そのものの代わりに居座ってしまうとあるが、これはどういうことか。本文中のことばを使って、七十字以上、八十字以内で書きなさい。

問四 4相対化とあるが、ここでの意味として最も適しているものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　ただ一つの絶対的なものではないと、とらえ直すこと。
イ　細かい部分まで、もう一度正確に調べ直すこと。
ウ　自分の考えを捨てて、ほかの人の考えに従うこと。
エ　いくつかのものを一つにまとめて整理すること。

問五 本文で述べられている筆者の考えと合うものとして最も適しているものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　地図にたよらず、ありのままの現実に直接向き合うことこそが、理解には大切である。
イ　抽象は現実から遊離した思考なので、物事を正しく理解するための手段にはならない。
ウ　抽象は世界の大部分を捨ててしまうので、できるだけ多くを描きこんだ地図を使うべきだ。
エ　理解とは、何を取り上げ何を省くかを意識して選び、その選び方を見直し続けることだ。

解答（答えと短い解き方）

第1回　論説文　地図と抽象

問一　イ

第③段落「すべてを写し取った地図は、もはや地図としての役目を果たさない」から。次の段落まで読んで理由をさがす。

問二　a　それを使う人の目的　b　世界をどの（世界をどのように見るかという一つの視点の表明）

aは第④段落の「に応じて」の前、bは「写しであるよりも先に」のあとをさがす。

問三　（例）ある見方で世界を整理することに慣れて、それが数ある見方の一つにすぎないことを忘れ、描かれていないものは存在しないかのように思い込んでしまうということ。

採点の要素：①ある見方に慣れきる　②数ある見方の一つにすぎないことを忘れる　③描かれていないものは存在しないかのように思い込む。

問四　ア

「相対」は「絶対」の反対で、ほかとの関係の中でとらえること。自分の見ていた世界が「数ある見方の一つにすぎない」と気づく。

問五　エ

第⑨段落の結論（何を拾い何を捨てるかを自覚的に選び取り、その選択を絶えず問い直していく営み）の言いかえ。

くわしい解き方は創心館出版の攻略テキスト（別冊解答）に載っています。